

幼児の我儘についての一考察

(其の一)

名城大学

田中一成

一、研究の目的 家庭に於ける保育知識の程度を問題にした昨年の研究大会での発表によれば、幼児の我儘を躰の困難として訴える母親の非常に多い事が判明した。(困難の第一位)又これは今年五月三日、東京学芸大で(日本教育学会第十部)発表された島根大学の舟木氏の集計の中にも同一の結果が見られている。

そこで我儘とは何か、又我儘を改めるには如何にすべきか、を解決する事は母親が躰の面から問題とする価値があると共に、性格形成の重要な時期に於て、非社会的な我儘な態度を矯正する方法が探究されなければ、一個の性格をついにゆがんで形成する事にもなりかねない、こゝに問題として取り上げたのである。

二、研究の方法 一つの幼稚園、二つの保育園及び学生の家庭に於ける実態調査を行う一方、一少年Y君の十五年間の成長の間に於ける記録を辿る事に依って、それらの集計の結果と照合する方法を取った。然し矯正法までは到達していない。

三、研究の結果について (A)我儘の概念について一般に我儘とはその生活に於ける人間関係を於て、本人の意志が如何なる場合にも自由に通過せしめられる状態が、幼少時につきその結果自己中

心的な性行が次第に固定化し、成長と共にその傾向を強めてくる結果、今まで幼児中心主義に過ぎた周囲の人々が、色々な条件からの傾向を取扱上困難を感じ出した時に云われる言葉である。この自己中心的傾向は第一表の様な結果となった。所でこの様な項目は一概に我儘の故とのみ断定する事が出来ない。それは一方に幼児の自我の萌芽を考えなければならぬからである。然もこの第一反抗期と云われる一つの傾向性は、幼児が親の自分に対する愛情を確め様とするものであり、又正常な意志の所有者は反抗期が見られると云う事からも、むしろ望ましい事であるとすれば、この反抗期と我儘とが重なる時期の幼児の躰は、家庭の母親がそれを充分認識していない時はその躰の方針を誤る事になるのである。こゝに三十四・五の各項目などは真に我儘であるか、反抗期の故なのかを明瞭に区別する事が出来ない。故に一般家庭の母親が我儘であると記入した事は、その数字を丸呑みに出来ない事になるのである。

(B)我儘の原因は何処に求められたか―調査の結果は第二表の通りである。これに依ると。(1)家族構成、(2)兄弟順位、(3)そしてこれらと関係して家庭人の愛情過度、又は愛情表現のまずさがその原因として挙げられる。何故に愛情過度が現われるかは、調査しなかつたが、一般に日本の親たちは第二表に見られる様な愛情過度の傾向が強いのではないか、特殊な例は多数の原因が見られるけれども、「児童心理」五月号上田氏の論文―調査に現われた我儘のすべてが上田氏の上げる溺愛の原因によつたものとは考えられない。

何となれば、調査項目の一から五までは合計の全体の七五パーセントとなり、長子や末子に愛情の集中する傾向は一般的に愛情過度を物語るものと思う。

(A)我儘形成の時期について―家庭に於ける母親の子供に対する

第一表 家庭で見られる我儘にはどんなものがあるか

項 目	保 育 機 関		花 崎	名 城	学 生	成 生	合 計
すぐ泣いておどす			33	35	116	5	189
だだをこねる			29	38	100	7	174
自分のしたい事を通さうとする			61	55	189	30	335
親の云うことをきかない			19	20	69	7	115
反 抗 す る			6	9	30	4	49
そ の 他			5	2	8	2	17
計			153	159	512	55	879

第二表 我儘になった原因

項 目	調 査 区 分		名 城 (実 数)						花 崎						山 形 成 生			合 計	
			長 子		次 三 子		末 子		長 子		次 三 子		末 子		長 子	次 子	末 子		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男		女
祖父母の可愛がり	4	7	4	0	1	0	5	9	3	1	2	1	1	1	1	1	1	1	40
初の子の故に	14	12	0	0	0	0	13	16	0	0	0	0	10	0	0	0	0	65	
末つ子の故に	0	0	0	0	6	9	0	0	0	0	19	16	0	0	10	0	0	60	
一人つ子の故に	2	4	0	0	0	0	4	5	0	0	0	0	1	2	0	0	0	18	
体の弱い子の故に	7	5	1	3	2	0	9	5	5	1	2	2	1	0	1	1	1	44	
女の中の一人男子故に	2	0	0	0	2	0	5	0	0	3	0	4	0	1	1	0	0	18	
男の中の一人女子故に	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	4	0	0	0	0	0	0	7	
長い間なくて出来た子故	1	1	1	0	0	0	3	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	8	
女中や乳母まかせ故	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
そ の 他	1	2	0	0	1	0	0	1	2	5	1	2	2	6	2	2	2	25	
合 計	31	33	6	3	12	12	37	39	10	10	28	26	15	10	15	15	15	287	

第三表 子供をしつける母親の態度

項 目	調 査 区 分		名 城	花 崎	学 生	天 童	合 計
子供に出来る事は子供にさせる			75	76	111	45	307
子供に出来ることでも親が手伝うことがある			38	67	73	20	198
親がすべて子供の世話をする			11	19	28	0	58
忙しくて世話が出来ない			13	21	45	9	88
子供が多くて手がまわらぬ			6	13	30	4	53
赤ん坊がいて手がまわらぬ			9	8	22	7	46
老人が子供の世話をする			0	3	8	1	12
使用人にまかせてある			5	1	8	0	14
合 計			157	208	325	87	777

第四表 幼児の我儘についての見通し又は意見

項 目	調 査 区 分		名 城	花 崎	学 生	天 童	合 計
先天的で直らぬ			0	5	18	0	13
親の我儘の血を引いているから直らぬ			1	2	3	0	6
成長と共にわかまえが出来て直る			54	87	76	23	240
躰如何によって直すことが出来る			54	93	88	32	267
わ か ら な い			6	4	4	2	16
合 計			115	19	179	57	542

態度を集計すると第三表の通りであつて、吾子が我儘であると反省する母親の半数がその態度に於て正しい。にもかゝらず我儘な子が出来たと云う事は、その子供が我儘ではなく反抗期であることを思い違ひをしているのか、家庭に誰が我儘にする人がいるのか、又は今は正しい態度であるが過去に於ては正しくなかつたか、さらには素質的な傾向性か又それらの場合かであろう。吾々は乳児に於ても既に性格形成の始つてゐる事を學んでゐる。正しい愛情、適度の愛情は幼児の精神生活には不可欠の糧であり、それが欠ける様な生活を無くそうとする努力が一般社会に於ても続けられてゐる。然し一般家庭の特に若い未経験の母親にはその適量が理解され難い事もありうるであらう。とすれば幼児の我儘的性行は彼等がある程度成人と人間交渉を行へる以前、乳幼児頃から毎日の生活の中に蓄積されながら、四歳頃になつて発現する、と云う考え方も出来るであらう。

(D)我儘は直るものと一般に考えられてゐること―幼児は我儘の故に母親を悩ましてはゐるが、然しその我儘は後天的のものであつて、成長と共に直るか又は馴によつて直ると考えられてゐるのであつて、集計の結果は第四表の通りである。この表は今年五月三日発表された島根大学の舟木氏の御発表の中にもうかゞわれる。即ち氏の調査された中で「将来のことを考へて現在困つてゐる事」の中では「現在困つてゐること」で第一位にあつた我儘的態度はその数を半減してゐるのである。即ちこゝでも親たちは我儘については楽観的である。又この事は第五表(略)によつても裏付けられてゐる。この表に関する限りは直つた者と直らなかつた者との比は二対一であつて、教育機関へ入る事によつて幼児の態度が改善された事が理解される。しかも幼稚園又は保育園へ入つて良くなつた者は最も多いのである。これらは程度の軽い我儘者と見ることが出来るのであつ

て、幼児は一方に自我の発生があるが、他方に社会性の目覚ましい進歩があつてその勢いが教育機関に入つて一層刺戟された為と思われる。これらの発達是我儘的態度とは相反するから自然の発達に乗じて我儘を改めると云う技術は考へてよい事ではなからうか。

一般に考えられてゐる我儘―自我の混入した我儘―はかくして小学生の中学年頃までに矯正されなければならない。さもなければ後に見る事例の様なゆがんだ性格形成が行われなとも限らない。

四、事例―Y少年の場合

昭和十六年四月六日愛知県豊田市に検事の次男として出生した。長男及び長女はいずれも誕生を迎えずして他界した。従つて事実上独り子として成長した。而も彼の出生後半年で父親は病死し、母子二人は生家に引きとられた。母親は戦時中海軍工廠の寄宿舎の寮母となりYのみ祖父母二人に保育せられた。母親は月二回の休みに日帰りする程度で別居と同じであつた。Yは出生以來体が弱く毎月風邪を引き祖母の苦勞は大変であつた。母親の弟は出征中であり祖父母は弱い孫故、又先の二人の死亡した事もあつて大事々に育てた。

そのYはやがて保育園へ入れ様とした時、祖母を離れず入園放棄のやむなき内弁慶の甘えつ子になつてゐた。戦争が終つて母は一時生家へ帰つたが一年とたゝぬ内に内母子寮の事務員として勤務する様になり、寮の仕事の関係から母子は別居し、戦時中と同じ状態に置かれた。なおYの叔父は復員しYが一年生の時結婚し家族構成に変化があつた。Yは身体は丈夫になつたが祖父母の手に育てられると云う環境の変化がない為、その性行に於ては後で見られる様に五歳法にして二点台と云う、そして我儘的性行を如実に現わすものであつた。二年生の時従妹が生れ、三年生の時祖父が病死すると云う家族構成の変化は、叔父がYに小言を云う事を祖母が正しく理解せず

反つてYをかばうと云う態度に出る様な祖母の溺愛を来す結果となり、悪くはなつても改善する方向へは進まないものであった。かくして小学校—中学校の生活がつぎ今日に至るのであつて、母子の密接なつながりのない、又父親を知らないYの性格のゆがみは小中学校の性行査定に見る様なものとなつた。小学校では第四学年までは性行の平均は二・六三—二・四六一—二・五八で一般より低く、特に二—三—四—七—十六—十七—二十一の各項目が低い、そしてこれらには我儘と關係が深い項目である。精神発達の面からも云える事ではあるが、第五学年から性行点は上昇し平均で三、五四—四、〇九となつた。これは教師の指導もあり、クラス役員や児童會書記などをする様になつて態度に変化を見た様に思われる。然し家庭では相変わらずであつた。又交友關係は一般に自分よりも知的にも低いものを選び、それらの友人を自分の思う様に使うと云う様な点も注目される所である。彼の場合は程度の高い我儘と云える。

中学校時代の性行は平均に於て三、七五—四、三七—四、六二と少しづつ改善されている。然し六—七—八の各項目に於て一般と低い水準にあり、我儘的態度の關係ある項目である事を考えれば、中学生に於てもその影響が尾を引いている。一般に親達が考えた様に成長と共に直ると云う意見はY少年の場合にはあてはまらない。

私の考えではこの性格形成には素質も考慮されなければならぬと考える。Y少年の父親の事はよくわからないが、その姉や姉たちの親は我を通そうとする態度の人一倍強い点がかがわれる。

兎に角生活環境が一般調査に現われた我儘の原因の多くを一人じめとしておりその改善が不可能な家庭であつた事は、性格形成のゆがみとなつて結果したものであろう。以上保育機関に入つて直る程度の我儘と直らない場合とを分ける事が出来たが問題は後者である。

幼児指導のための

パソソナリテイの一調査

—中間報告—

北海道立教育研究所員

小林 幹 夫

1 目的と研究経過

過去数年の現場における幼児指導を担当し、更に其の間に種々当面した研究活動を通じて、最もむずかしい問題はパソソナリテイの問題であつた。日々の指導に迫られ、こういう事柄が学問的に又實際的に解決出来なければ真の意味のしつけをはじめ、保育問題としてのケースワークとかグループワークの實際に確信もつてのぞめないのではないかと考えるにいたつた。(此の事は発表資料の序にも一部ふれてある)

その為にはどうしても科学的方法のたすけをかりねばならなかつたのであるが、何せ一つの方法として心理学的な接近にしても、報告者の能力もさることながら、おいそれと適確な手法を示してくれない。とにかく苦しまぎれでも幼児指導の為パソソナリテイの研究の必要にせまられ、どうにか役に立てたいとこんな風にもやつてみたという程度で、今後を期してさらにつみあげ進むことにし、中間報告とさせていたたく次第である。調査研究の過程は昭和二十四年より三年間現場指導で事例研究を主体に、ついで基礎的(理論研究)